

ELTama Newsletter

August 2014 vol.02

発行:玉川大学英語教育研究会 〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 tel. 042-739-8816 fax. 042-739-8847

英語科教員養成フォーラム開催を契機に

玉川大学文学部教授・玉川学園理事
高橋貞雄

文学部は、学科の改組を行い、2015年4月に「英語教育学科」を開設する準備を行っています。その記念として、5月10日に「英語科教員養成フォーラム—求められる資質と能力」と題したイベントを開催しました。ここでは、文部科学省教科調査官の直山木綿子氏の記念講演をはじめ、小中高のそれぞれの有識者によるショートレクチャー、新学科の概要の説明がありました。会には多方面から約150名の参加があり、大変有意義なものとなりました。貴重な機会なので教職課程を受講している学生諸君にも参加してもらうことにしました。

学生たちには、3つの課題を設け、その場で記載して提出してもらいました。短時間とはいえ、全員が思ったこと、感じたことをA41枚の余白を残すことなく書いてくれました。その参加記録を読みながら私が感じたことは、学生はスポンジのように吸収する、固定観念にとらわれることなく素直に理解する、ということ。さらに思ったことは、これから日本の英語教育を変革し、担っていくのは彼ら若い世代だと、彼らならば期待してもよいのではないかということでした。私は彼らのサポーターでありたい、今は心からそう思います。

ここでは、参加記録の中からほんの少しだけ原文のまま紹介しておきたいと思います。

1. 新しい英語教育政策で何が一番重要だと思うか。また、その理由は何か。

新しい英語教育政策では、今より高いレベルが求められている。それに伴い、英語科教員の能力もより高い英語力が求められるはずである。そんな中で、私は教師の指導力が新しい英語教育政策で一番重要なと思う。グローバル化していく日本に対応するために、より高いレベルでの英語教育を進めていくにしても、生徒がついていけなければ意味がない。教師が生徒の立場を考え、「こうやって教えれば生徒にとって分かりやすいだろう」などの細かい指導方法を考えるべきである。この理由は、現段階で生徒の7割が英語教育の目標に達することができていない。この状況のまま、新しい英語教育政策を進めてても「もっと勉強しなきゃ」という生徒の負担を増やすだけになってしまうと思うからである。だから、私は教師の指導力を向上させ、分かりやすい授業、生徒が興味関心を持つ授業をすることが一番重要なと思う。

(小杉彩織)

2. 英語科教員の資質と能力で最も重要なことは何か。
まず、外国語によるコミュニケーションの技能として、子どもの発達に応じた英語を指導できる力が求められる。そのためには子どものことをよく知っていること、子どもの姿を肯定的に見ることができ、子どもの変化をしっかりとみてとれることが大事である。なぜなら、授業の主役は生徒であるからである。生徒に英語を好きになってもらうためには、どうすればよいかを先生は考える必要があるし、先生も英語を好きである必要がある。そのための授業デザインでは、英語を楽しいと思ってもらうために指導力として大切なのは、明るさ(=教室の空気を明るくすること)、演技力(=あくまで生徒が主役、先生は助演である)、メッセージを語れる話術、人間力(=人間としてあるべき姿を見せること)である。まず、英語科教員である前に義務教育の教員であるという責任感をもち、英語はその1つの手段であるということをしっかり頭におき、教員を目指したい。(遠藤優里)

3. 教職課程を受講する中で、今後最も伸ばしていきたいと思うことは何か。

私が今後伸ばしていきたいと思っていることは、英語の専門性とコミュニケーション能力である。英語の専門性は、今後英語という教科が更に重要視されるようになり、小・中・高においても私が通っていたころよりも高い目標が掲げられるようになっているため、教師の英語の高い能力が求められるようになっていることに対応できる力をつけることである。英語の専門性というのは、4技能はもちろん、どのように指導するかという指導力も含んでいる。自分の英語力を高め生徒にわかりやすく英語を教えることができるようにならなければいけない。次にコミュニケーション能力については、まずは英語によるコミュニケーション能力をつけたいと考える。英語を使った授業を進めるにあたっては、生徒により分かりやすく英語を伝える力や、生徒と教師のやりとりを上手く行うことが大切であると考える。また、新しい英語教育計画においては、小・中・高一貫してコミュニケーション能力を養うことが目的とされようとしている。そのためこのことに対応できるようにしたい。次に英語だけのコミュニケーション能力だけでなく、教師と生徒、教師同士、保護者とのやりとりなど教師として必要なコミュニケーション能力も伸ばしたいと考える。教師は人と関わる仕事なので、どのような場面においてもコミュニケーション能力は重要なと思うからだ。

(浅利佳歩)

実践・研究ノート

言語を通して子どもの環境を整える

横浜市立阿久和小学校 国際教室担当
小栗瑠子

はじめに

現在私が勤務する横浜市立阿久和小学校は、県営阿久和団地の中にある小学校であり、学区も阿久和団地内に限られている。児童数は年々減少しており、平成26年度は全学年単級（1クラスのみ）となった。その一方で、年々増加しているのは、外国籍または外国につながる児童数である。年度途中の転入も多く、平成26年度は児童数の約4割を占めるほどになった。その児童のうちの多くは日本生まれであるが、中には来日間もない児童もいる。どちらにしても、学校での言語は日本語、家庭内言語は親の母語で生活をしている子どもたちである。そんな児童や家庭を支援するために、阿久和小学校には国際教室が設置されている。私は昨年度からその国際教室を担当している。学校と家庭で使う言語が違うという複雑な環境に生活する彼らは、うまくいければ「第一言語」と「第二言語」の両方を身につけることができる。その一方で、両方の言語運用能力が育たない「ダブルリミテッド」という問題を引き起こす可能性もある。彼らの言語環境をいかに整え、それによって「生きるために」「考えるため」の言語能力を育めるかが問われている。

外国籍児童が抱える問題とそれに対する支援

（1）日本語がわからず、不適応を起こす。

来日後間もない児童が多い。実物や写真・絵を用いて、場所や持ち物の名前、学校のルールなどを教え、生活に困らないようにする。また、ダブルリミテッドにならないように、発達段階に合わせた指導をする。

（2）学習についていけない。

外国籍または外国につながる児童は、学校へ行くと家庭では聞いたことがない言葉に出会う。例えば、「黒板」「教科書」のように、周りの児童が当たり前に知っているような言葉も家庭では使わない言葉なので、学校で教えていく必要がある。これは、日本生まれの児童にも言えることである。それは、家庭内言語と学習言語では使用する単語が異なるためである。JSLカリキュラム（学習活動に参加する力を持つために、日本語指導と教科指導を合わせて行う指導）等を活用し、日本の学校教育をその児童が自分自身の力で理解できるようになるための力をつける必要がある。

（3）将来の保証がない。

親の仕事の都合などで突然帰国してしまう児童も少なくない。帰国の期間が「1ヶ月」と言っていたはずが「1年」になることもある。そして再び日本に戻った児童は、ほとんど日本語を忘れてしまっている。そうなることがないよう、たとえ短期の予定でも、帰国する際には必ず面談をし、日本に戻ってくる予定日な

どを聞いておく。また、入学・編入時に、将来は帰国するのか、日本に永住するのかを聞き、できるだけ見通しをもって指導できるようにする。

（4）親子のコミュニケーションがうまくとれない。

日本語で困ることがなくなってくると、徐々に母語を話すことが減る。すると、家庭でのコミュニケーションに支障が出始める。明日の学習に必要な持ち物を親に伝えられなかったり、学校の様子が親に伝わりにくくなったりする。特に臨界期（10歳前後）に来日した児童は、日本語が第一言語になり、このような状況に陥ることが多い。このようなことを防ぐためにも、家庭では母語を教えるように頼んだり、学校でも母語に触れられる機会を作ったりして母語を保持できるよう努力する必要がある。

（5）アイデンティティーを見失う。

例え日本生まれの児童であっても、家庭では母国の習慣や文化が深く根付いた暮らしをしている。しかし、それを意識して生活している児童は少ない。中には「あいつは〇〇人だから」と、他の外国籍児童を中傷するような児童も残念ながらいる。彼らが成長し、自分自身を客観的に見られるようになったとき、周りとの違いを感じるようになることは十分予想されることである。自分の親はどの国からきたのか、その国はどんな習慣や文化をもっているのかを学ぶ必要があるのだ。そうして知った自分のルーツである国のことを探り、友だちに国のことを使ってもらったりするきっかけになる。このようにして「多文化理解」を進め、「多文化共生」を目指していく。

おわりに

阿久和小学校に通う児童が抱えている環境は多様であり、複雑である。毎日彼らと接していると、私にとっての「あたりまえ」は、彼らにとっては「あたりまえ」ではないことに気づく。そんな彼らが共に6年間を過ごす阿久和小学校では、確実に「多文化共生」の考えを取り入れた学校づくりが必要になってきている。私は「言語」を切り口に彼らの環境を整え、「生きるために」「考えるため」の言語能力を育てるこをを目指し、日々指導している。その能力は、「日本語」や「英語」など、ある特定の言語に限定されたものではなく、どの言語を運用する際にも共通して生かされる力である。そして、彼らの社会で生きていく力を少しでも伸ばしていくようにこれからも取り組んでいきたい。

低学年（1～4年）の英語教育

玉川学園低学年英語科主任
小川恵子

1 概要

玉川学園ではK-12の教育改革により、幼稚部から高校3年生までを、幼稚部（K）、低学年（1～4年生）、中学年

(5～8年生)、高学年(9～12年生)というくくりで、2006年から一貫教育を実施しています。

低学年の英語科目標は、

- ①言語や文化に対する理解を深める。
- ②自己表現力を育てる。
- ③国際交流プログラムなどを通して相互理解力を高める。

上記の中でも、表現力の育成には特に力を注いでいます。

授業回数は、1年生45分を週1回年間で35回、2～4年生週2回年間で65回程度です。指導形態は、日本人教員とTESOLの資格を持つ外国人教員がペアになり、クラスを二分割して少人数クラスで指導に当たっています。ちなみに、5、6年生は週3回年間で100回程度を日本人と外国人の教員が指導しています。教員数は1～6年で日本人教員4名、外国人教員5名です。

教材は、Longman発行の“Super Kids”、Oxford Univ.発行のORT Kipper's Stories、文科省の“Hi, friends!”、自作教材の歌集“Let's Sing!”などです。自作教材の歌集はEペン対応で、電子黒板とも連携しています。単元によって教材を色々に組み合わせますが、何と言ってもEペン対応の歌集は一番人気の教材です。

2 授業で大切にしていること

1～4年の英語学習を一言で言うなら、おもちゃ箱から次々おもちゃを取り出して、五感をフルに働かせながら英語で遊ぶ活動です。集団での遊びですから、コミュニケーション能力が自ずと培われていきます。一つのメソッドに偏らず、様々な場面での経験を通して英語の基礎を築くことに重点を置いています。

英語の授業は英語教室で行います。英語教室は英語圏であることを意識させ、英語教室に足を踏み入れたら英語のスイッチが入るように、環境を整えています。英語のクラスで身につけるネームタグはパスポートで、これをつけたら英語を話す人になると、いつも子ども達に話しています。

授業の中で特に大切にしている場面があります。それは児童が自分から発信する場面で、自分のことを自分の言葉で表現する活動です。子ども達は常に言いたいこと、伝えたいことを持っていましたから、それをしっかり発信させ、互いを知って関係を深める場を創っていきます。パターン・プラクティス的な活動ではなく、自分自身を表現することを通して英語力を伸ばしていきます。

最後に、様々な出会いから学ぶことも大切にしています。玉川学園には海外提携校から毎年200名前後の留学生がやってきます。その中には低学年を訪問して交流活動に参加する生徒が大勢います。また、提携校の教員も来園し、異文化理解をテーマに授業をしてくれることもあります。こうした出会いは、いつか使う英語の学習ではなく、まさにリアルタイムの英語学習で、子ども達にとって思い出深いものとなります。

3 新しい取り組み

K-12英語科で推進しようとしているのが、Can-doリストの作成です。幼稚部から英語に親しみ、海外との交流を盛んに行っている玉川の独自性を前面に出し、児童生徒がゴール

を意識しながら学習に向かうことができるCan-doリストの作成を目指します。これが次年度の教科重点目標になるでしょう。

低学年では他教科とのリンクをさらに充実させようと考えています。美術で製作したパペットが英語で自己紹介をする、といったリンクです。

新しい教材の開発も計画しています。大人気のEペンですが、今は歌集にのみ対応しています。第二弾として、Eペン対応の単語集を作成しようと考えています。

新しいことに果敢にチャレンジしながら、子ども達が目を輝かせ取り組む英語の授業を目指していこうと考えています。

丘でお会いしましょう。

英語で行う授業

江東区立深川第二中学校 教諭
丹呂 優子

発表は当日、中学校2年生を対象にした「夏休みの思い出」をテーマとして、江東区英語科でT.Tを実施しているBritish CouncilのTeaching Materialsを参考にして立てた指導案をもとにワークショップ形式で行いました。ここでは、英語で授業を行う指導案作成に役立つと思われるなどをまとめました。

Warm-Upでは、本時の授業で必要となる語句をあらかじめ生徒から引き出し、クラス全員で共有する。必要があれば、教師が本時の活動で生徒の役に立つと思われる語句や表現を補充する。(input)

この作業は、列対抗や班対抗などのグループ活動にすると取り組みやすい。本時は列対抗でしたが、班活動で取り組む場合、Mind Map作りも学年が上がるにつれて、有効である。

ワークシートの構成は、前半は基本語・基本文の確認、後半は多少制限を加えながらPersonalizationを意識した活動になるように工夫する。前半部分のワークシートは、後半の活動(Surveyや日記、E-mailを書くなどのWriting活動)に必要な言語材料を、英語に苦手意識のある生徒でもあとで調べられるように、Matching(絵と語句を線で結んだり、絵の下に語句を選択して記入させる形式のもの)など、どの生徒でも比較的容易に取り組める活動を入れることが多い。また、必要があれば、事前にカードを使ってカルタや神経衰弱、Mingle(立ち歩いて次々にパートナーを替えてカードを交換して練習する形式)を通して復習・確認の機会を与えてから取り組ませるとよい。

後半にやるワークシートは、前半の活動で使った表現が発展的に学習できるように、モデルを参考にしながら自分のことについて短い文で日記やE-mailを書かせるなどの活動を入れることが多い。

ワークシートの取り組み方については、個人でやらせることがあるが、ペアで相談したり、個人でやったあとペアで比較させると、苦手意識のある生徒も安心して取り組むことができる。また、手助けした生徒のやりがいにもつながる。

(peer teaching)

全体での答え合わせは、教師が机間巡回を行う程度にして、省略することもあるが、何人かの生徒に絵を渡して、黒板に書いてある語句の下に貼らせるなどの形で生徒の参加型にすることもある。こうすると、やや苦手な生徒も他の生徒の様子を見てから、答えを決めることができ、あまり不安を与えることなく活動に取り組むことができる。また、発展的な Writing 活動については、ワークシートを提出させ、教師が添削する場合が多い。

後半の活動は、語句から対話形式の表現につなげていく。ALT と JET で Model Dialog を示し、二人がどんなやりとりをしていましたかを思い出させたり、生徒たちから Talking Point を引き出す形で進めていく。黒板やワークシートには、会話に必要な表現を全て記述しておくことも可能であるが、ところどころに空欄を入れ、会話するときのヒントになるようにすることも多い。後半の活動では Survey (友達にインタビューして内容をメモする活動) を多く行う。あくまで記入はメモにとどめ、Speaking に重点を置くようとする。時間があるときは、シンプルな形で英作文にまでつなげたり、Survey で得た結果を Reporting するとよい。例えば、I went to a festival with my friends. → Yuki went to a festival with her friends. などのように、言い換えが必要なことで、3 人称で表現する点を意識したり、Reporting があることで、より集中して相手の言ったこと聞くようになる。また、人の表現を聞き、「あんな風に言えばいいんだ。」などと他の生徒にとどめても表現力を広げる効果が期待される。

最後に

英語で授業を行うには、入門期に、授業で指示する表現ができるだけ英語で慣れさせるのはもちろんのこと、生徒が英語を使えるように支援する表現、例えば “How do you say, ○○ in English?”, “How do you spell that?” や英語で説明したことの内容を確認するため “What's ○○ in Japanese?” などの表現を使ったり、ゲームのルール確認では、“Can I show the card?”, “How many people do we need to speak to?” などできるだけ英語で Concept Check をするよう努めると input を増やすことができます。

また、4 Corners (教室の 4 隅に情報を掲示し、グループで分担して情報を集める活動) や双六など、活動にバリエーションを持たせると、生徒の動機づけにつながることがあります。グループ活動も、日頃からいろいろなグループ活動に慣れさせておくと、日によってペアを数種類組み替えたり、4 人グループ、活動班、列などその活動にふさわしい形を選ぶと生徒たちの意欲が高まり易いです。

新しい試みは上手くいったり、上手くいかなかつたりと、やってみないと分からぬことがあります。

ご自分がよいと考えたものを、まずは失敗を恐れずやってみて、生徒の反応を見ながら修正していく方法をお勧めします。直ぐに修正できる場合は、次のクラスで改善することができますが、次が 3 年後ということも、起こります。私の場合は、授業でやった後に直ぐに反省点や、もし次にやるときのアドバイスをメモしておき、未来の自分に役立てています。

人は進化していくものであってほしいと願いますが、慣れることによって、考えが固まってしまいがちです。時には若い時の新鮮な考えがより良いこともあります。ぜひ、試してみてください。

英語で行う英語の授業について

東京都立園芸高等学校 教諭

才藤 達朗

「高校の英語の授業は英語で行われる」ということが世間で話題になっている。これは、文部科学省が「(英語の)授業は英語で指導することを基本」(文部科学省, 「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」)としていることや、高等学校学習指導要領において「適切な言語活動を英語で行う」(文部科学省, 2009:87-92)と書かれていることに起因するものと考えられる。

本論は、公立高校においてコミュニケーション英語 I (C.E.1) の教科書読解を少しでも英語で行うための工夫を紹介することが目的である。本論では主に三つの工夫を紹介していく。

一つ目は、本文の英語による Oral Introduction(O.I.) である。O.I. を行うことで、題材に対して生徒の興味関心を喚起することができる。また、本文の内容をおおまかに理解した上で本文読解を行うので、本文のリスニングや読解をスムーズに行うことができる。加えて、前時の復習として O.I. で用いた英語を生徒に聞かせ、質問すること (Oral Interaction) によって、英語を聞き、発話させる機会もつくることができる。

O.I. を行うに当たって、はじめは教科書に付帯するピクチャーカードを用いていた。しかし、ピクチャーカードの絵に対する生徒の反応が薄く、積極的に授業に参加しているようには見えなかった。その理由として、絵が「上手すぎ」る上に、あらかじめ用意されたものであるため、生徒が無機質に感じたからではないかと考えた。そこで私は、絵を黒板に描いて O.I. を行うこととした。その場で描かれる絵は適度に「下手」であり、次に何を教員が描くか予想がつかないため、生徒が関心を持って、また時には笑いをもって O.I. に参加してくれるようになった。

二つ目は O.I. で用いる英語台本の作成である。私は英語の母語話者でもなければ、英語圏への留学経験もない。そんな私が英語で授業を行うためには台本の準備は不可欠であった。初めは台本に授業で話す内容をすべて書き起こしていたが、そうすると台本ばかりに気を取られて、うまく授業が進められなかった。また授業中に台本をただ棒読みてしまい、私の英語の練習なのか、生徒の英語の練習なのかわからなくなってしまった。このような反省を踏まえ、現在ではアウトラインと重要なセンテンスのみを書き込んだ簡易版の台本を使用している。また、台本には、口頭で何度も単語との意味を生徒に聞かせ、復唱させる目的で、教科書本文の新出単語や重要単語も必ず盛り込んでいる。

三つ目は教科書の本文訳を渡すことである。C.E.1 の本文には、どうしても訳読、精読をしなければならないターゲッ

トセンテンスがある。そのセンテンスは丁寧に訳読、精読するが、それ以外の部分を細かく訳読をしていると、O.I. やアクティビティを行う時間がとれなくなってしまう。しかし、本文をすべて訳さないと不安になってしまう生徒は相当数いることも事実である。そのような生徒を安心させるために、本文訳を渡すことにしており、この本文訳もただ本文を訳したものを使わず、英文の意味のかたまり毎に訳したものを使用している。その狙いは、英文を「最後から」ではなく、「左から」読めるようにするためである。また、重要なセンテンスや単語には部分的に空欄を設けて、個人で復習ができるように工夫した。

以上三点が、英語の授業を英語で行うために行った私の工夫である。個人的な意見になるが、現在の教科書の構成や大学受験の問題構成、定期考査の問題構成などをみると、いわゆるオールイングリッシュの授業をすべての高校で行うことはかなり難しいことだと感じている。また、本校のように英語が得意とはいえない生徒がほとんどを占める高校においてオールイングリッシュの授業を行うことが、生徒の英語力を伸長させる最善の手段であるとは考え難い。しかし、私自身も受けてきたような訳読みのみの授業が最善とも考えられない。英語教員一年目の2013年度は、「英語で指導することを基本」とする文部科学省の方針がある一方で、どのような授業が生徒にとって最善なのかを毎日考えた年度であった。本論が英語の授業を進める上で一助となれば幸いである。

【参考文献・資料】

- 文部科学省.(2009年3月).「高等学校学習指導要領」.
参照日:2014年6月20日,参照先:文部科学省:http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf
文部科学省.(日付不明).「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」.
参照日:2014年6月20日,参照先:文部科学省:http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_001.pdf

現場型リサーチ:

英語で言いたいことが言えるようになるために
—日本人英語学習者のための日英パラレル・コーパス—

玉川大学 文学部 教授
日臺 滋之

この「日本人英語学習者のための日英パラレル・コーパス」は、中学、高校の英語の授業で行われているコミュニケーション活動で、学習者が英語で言いたかったのだけれど言えずにあきらめてしまった表現を集めて作成したものです。

作成過程は以下の通りです。

- ・ コミュニケーション活動を終えたところで、用紙を配り、学習者に英語で言いたかったけれど言えなかった表現を日本語で書いてもらい、回収します。
- ・ 次に、その日本語表現をExcelに入力します。

・ 入力した日本語表現を英語に直し、日本語表現とその日本語表現に対応する英語表現が一对一になるように作成します。これで日英パラレル・コーパスの日本語と英語の部分は完成です。現在は2,400件ほどの日本語表現とその英訳が収められています。

使い方は、「このような表現を英語でどのように言うのかな」というときにこの日英パラレル・コーパスから検索ツールを用いて欲しい情報を取り出します。

この日本人英語学習者のための日英パラレル・コーパスはweb上に公開されています。公開するにあたり、Philip Rowland氏(玉川大学)、また、検索ツールEasyConc.xlsの開発に御協力いただいた内藤清志氏、EasyConc.xlsの開発に御協力いただいた大村あつし氏、「正規表現検索」の掲載許可を下さった日和佐康一氏に心から御礼申し上げます。

各検索ツールの使いわけは以下の通りです。

EasyConc.xlsは、iPhoneやiPadを用いて、中高生が手軽に日本語表現を英語で調べるときに便利です。

EasyConc.xlsは、先生が授業で使用する教材作成に役立ちます。

正規表現検索は、正規表現を御存知ですと扱いやすいです。

本プロジェクトの「日本人英語学習者のための日英パラレル・コーパス」は、科学研究費補助金研究の支援を受けています。

本稿では、EasyConc.xlsに絞ってその使い方と授業での活用方法について述べさせて頂きます。

EasyConc.xlsを用いた検索の方法

先生が授業で使用するworksheetを作成するときに便利です!

(1) プログラムのダウンロードについて

下記のURLにアクセスし、「EasyConc.xls」をダウンロードします。デスクトップに保存しておくと便利です。

http://www.tamagawa.ac.jp/research/je-parallel/EasyConc_1.xlsm

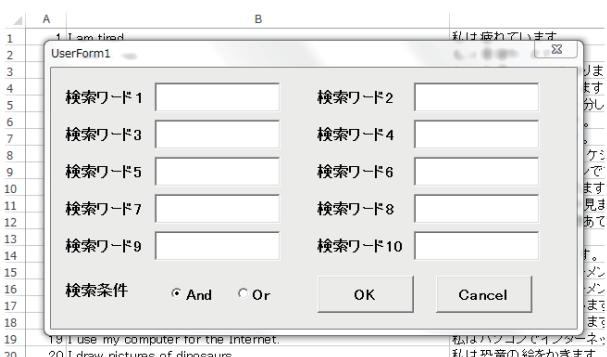
ダウンロードするファイル:EasyConc_1.xlsm

(2) 検索方法

面倒な操作はいりません。

① EasyConc_1.xlsmをダブルクリックし、起動します。このとき、「i保護ビュー 注意—インターネットから入手したファイルは、ウイルスに感染している可能性があります。編集する必要がなければ、保護ビューのまましておくことをお勧めします。」と表示されることがあります、「編集を有効にする」をクリックします。続いて、「iセキュリティの警告 マクロが無効にされました。」と表示されますが、「コンテンツの有効化」をクリックします。

② 続いて、CtrlキーとKキーを同時に押して、マクロを立ち上げます。下図を参照してください。



- ③ 検索ワードの1～10に順番に語句を入力します。検索語は10語まで使用できます。例えば、「～対…で試合に勝った」と言うときの英語表現を調べたいときには以下のように入力します。

検索ワード1	対	検索ワード2	試合
検索ワード3	勝	検索ワード4	
検索ワード5		検索ワード6	
検索ワード7		検索ワード8	
検索ワード9		検索ワード10	
検索条件		<input checked="" type="radio"/> And	<input type="radio"/> Or
		OK	Cancel

最後に、AND検索にチェックを入れてOKをクリックします。検索ワードの入力では、Tabキーを使用すると検索ワード間をすばやく移動することができます。

- ④ Sheet2に下記の検索結果が表示されます

B	C
We won the game 5 to 2. / The result of the game was 5 to 2. / In the next game we are going to play against Tsukukoma JHS.	試合の結果は5対2で勝利。次は筑駒と勝負する。

ここでは、検索ワードに日本語を用いましたが、英単語を入力しても検索することができます。試してみてください。

(3) 授業で用いた Worksheet の作成過程

英語による発信型日本文化がよく話題にされます。日本の正月に関連する英語表現を検索してみましょう。検定教科書ではページ数の制限もあり、カバーしにくく、中・高生から英語でどのように言ったらよいのか質問を受けます。

① 検索例

検索ワード

検索ワード1	元旦	検索ワード2	神社
検索ワード3	初詣	検索ワード4	おみくじ
検索ワード5	お年玉	検索ワード6	
検索ワード7		検索ワード8	
検索ワード9		検索ワード10	
検索条件		<input checked="" type="radio"/> And	<input type="radio"/> Or
		OK	Cancel

② 検索結果

以下のようにヒットします。

B	C
I went to the festival at Tamagawa shrine with my family.	私は玉川神社のお祭りに家族と出かけました。
I drew (choose) my fortune slip. I got the best one. (I drew the best one. I drew the worst one.)	おみくじを引いて大吉が出た。大凶が出た。
I went to Meijiingu on New Year's Day.	私は明治神宮に初詣でに行きました。
I visited Meijiingu on New Year's Day.	私は明治神宮に初詣でに行きました。
I couldn't get much money on New Year's Day.	お年玉をあまりもらわなかった。
I bought a Mac computer with the money I got from my grandfather as a New Year's gift.	おじいちゃんからのお年玉でマックを買った。
I visited a shrine on New Year's Day.	神社
I went to a shrine on New Year's Day.	初詣に行く
I drew my fortune slip at the shrine.	おみくじを引いた。
I visited a shrine on New Year's Day.	お正月に神社を参拝した。
How did you get to the shrine on New Year's Day?	(初詣) どうやっていたの？
Unfortunately, (or I regret that) I couldn't visit the shrine.	初詣に行けなくて悔しかった。
I drew a New Year's fortune slip at the shrine.	私は初詣でおみくじをひきました。
My fortune slip said "a little happiness".	おみくじが小吉

③ Worksheet例

検索結果から、落語の「三大嘶（さんだいばなし）」の手法を用いてworksheetを作成してみます。Worksheetの実践例は以下の通りです。

Challenge!

こんな表現を知っていると便利です。

I went to the festival at Tamagawa shrine with my family.	私は玉川神社のお祭りに家族と出かけました。
I drew (choose) my fortune slip. I got the best one. (I drew the best one. I drew the worst one.)	おみくじを引いて大吉が出た。大凶が出た。
I went to Meijiingu on New Year's Day.	私は明治神宮に初詣でに行きました。
I visited a shrine on New Year's Day.	神社
I went to a shrine on New Year's Day.	初詣に行く
I drew my fortune slip at the shrine.	おみくじを引いた
I visited a shrine on New Year's Day.	お正月に神社を参拝した。
How did you get to the shrine on New Year's Day?	(初詣) どうやっていたの？
I drew a New Year's fortune slip at the shrine.	私は初詣でおみくじをひきました。
My fortune slip said "a little happiness".	おみくじが小吉

三大嘶（さんだいばなし）

上の表現例を参考に、「元旦」、「おみくじ」、「大吉」に相当する英語を用いて、5文以上でお話を作り、英語で書いてみましょう。

日本人英語学習者のための日英パラレル・コーパスを、日々の英語の授業で活用していただき、学習者に少しでもお役に立てればこれに勝る喜びはありません。

【参考文献】

日臺 滋之 (2014) 「英語で言いたいことが言えるようになるために
—日本人英語学習者のための日英パラレル・コーパスー」,
インターネット, <http://www.tamagawa.ac.jp/research/je-parallel/>
(2014/8/14にアクセス).

編集後記

最後に、ELTama 所属の先生方の研究物が刊行されていますので紹介します。

『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』

(J.C. リチャーズ／R. シュミツ [編])

高橋貞雄・山崎真穂・小田眞幸・松本博文 [訳] 南雲堂

『これから英語の研究と教育—連携教育の展望と課題—』

(伊関敏之・酒井陽・相原完爾・久保田佳克・市崎一章・日臺滋之著) 成美堂

皆様、それではまた来年も玉川の丘でお目にかかりましょう。
(事務局)

